（四）

新しい野丁場が「多田」と知らされた時、私は何となく心ときめいたのです。

歴史好きの人なら

「清和源氏の……」

と聞いただけで、

「ああ、あの有名な」

とうなずくだろうと思います。

清和源氏の子、経基王が臣籍降下して源姓を名乗ったのが清和源氏の始めだそうです。

源氏を名乗るのはみな天皇の子孫で、他にもいくつかありますが、最も有名なのは、この清和源氏です。

経基王の子、満仲が摂津国多田庄を領して多田満仲とよばれましたが、その子孫には頼光、頼家、義朝、為朝、頼朝、義経などの武将が出ています。

足利、新田、吉良、武田などの名族もこの流れです。

若い人は別として、昭和十年代までに幼・少年期をすごした人なら、格別な歴史好きでなくても、

「源頼光の大江山鬼退治」

「その四天王の一人、渡辺綱と茨木童子」

「同じくマサカリかついだ金太郎でしられた阪田金時」

「八幡太郎義家の武勇」

「親鸞三郎義光の故事」

などを知らぬ人は少ないでしょう。

その清和源氏（多田源氏とも言います）の発祥の地が多田なのです。

源氏の子孫を自称した徳川氏は、江戸時代を通じて代々の将軍が、多田神社を尊崇しました。

まことに多田こそは、東の鎌倉と並んで清和源氏のメッカと言えましょう。

そういう土地へ行き、しばらくでも住むことになるのですから、歴史ロマンの興奮といいましょうか、好奇心のときめきといいましょうか、そんなものをそこはかとなく感じていたのです。

多田を更に少し奥に入ると多田銀山があります。

満仲や頼光の武力の背景には、この銀山を領有したことによる経済力が、大きく物を言っていたはずです。

降って、豊臣秀吉もこの銀山を大いに活用したことは史実として残っていて、その軍用金が埋蔵されているという伝説もあります。

もち論、今では銀山はすっかりさびれていますが、豊

太閤の埋蔵金伝説一つとっても、何やら楽しくなるではありませんか。

私はひそかな期待を持って来たのです。

しかし、現実はそんなにロマンチックではありません。

毎日の忙しさは前に書いた通りで、とても史跡探訪どころではないのです。それは仕事で来たので、物見遊山ではないから仕方がないにしても——。

この土地の寒さには驚きました。

東北や北海道へ来たわけではありませんから、まさか雪五尺というようなことはないのですが。

私たちが多田へ小屋入りしたのは、明ければ十月と月がかわる九月三十日でしたから、それから先にも冬が駆け足でやってきました。

土地の人の言葉だと

「川西能勢口あたりとこの辺では、気温がシャツ一枚違う」

と言うのです。

たしかに池田あたりへ飲みに行って、夜遅く帰ってくると、それこそ肌にしみてその温度差が判るのです。

この辺の地形は池田や能勢口より高くなっていますが、それなりに四方を山でかこまれた小さな盆地になっています。

能勢川の両岸のさして広くない平地が多田大橋の辺と、鼓ケ滝の辺でくびれていますが、能勢口の方から来ると鼓ケ滝のくびれはまるで多田の表門という感じです。

その鼓ケ滝のくびれの辺りをすぎると、車の中にいても、冷気が突然、五体を襲ってきて、おもわずえりをかき合わせます。

「シャツ一枚の違い」

とはよく言ったものです。

年末近くなった頃のことですが、しばらく使わなかったポンプを必要になって持ち出してみると、どうも調子が悪いのです。

しらべて見るに、鋳物の部分が二ヶ所ほどひび割れていました。

格別前にそんな破損はなかったし、また乱暴な取扱いをした覚えもありません。

いろいろ考えているうちに原因が判りました。判って「ムム」とうなりました。

つまりこうなのです。

ポンプの中に水が残っていた。それが寒さで凍ってしまった。水は氷になるとぼうちょうして体積を増します。そのぼうちょうした氷には逃げ場がありません。

ぼうちょうする圧力がポンプの部位の最も弱い部分に

加わってひび割れが出来た。
そうとしか考えられません。
「そんなバカな」
と思われるかもしれませんが、この話が信じられないとすれば、次の話を聞いてもらうより仕方がありません。
年が明けてから能勢川が凍ったのです。
或る朝、現場へ行く途中、車の中から眼下の川面を見て、驚きました。
川の全部ではないけれど、両岸に近いところから中心へかけて、川面が白くなっているのが、
「アレ、今日は何だか変だ」
と思って見ると凍っていたのです。
川が凍るなんて話は、遠い北海道とか、中国やシベリヤのことと思っていたから驚きました。
そして、改めてこの土地の寒さを確認するわけです。
忙しさと寒さとで、多田の史跡を探る散歩などという洒落たことはおあづけです。
労災の一時金で買ったカメラも使うときがありません。
仲間たちが小間割りで先に帰ったあと、測量のため後に残り、翌日の段取りをすませて飯場にもどるとき、国土の監督の車に便乗できればいいが、そうでなければバスで帰らねばならず、そのバスも一時間に二本ぐらいしかありませんから、時間待ちの都合では歩いた方が早いというときもあり、そんなときはしみじみ情けなかったものです。
それでも、多田では仕事が出来るのはいい方です。時には競馬場のコンクリだからと朝からかかえに来て、尼崎に連れて行かれます。
そのころ、松本組のコンクリに、私は絶対必要人員だったのです。
経験のない人には判りかねると思いますが、階段、窓壁のうすい所などへコンクリを注入するには、独特のコツがあって、誰にでも出来るものではありません。
私はそういう所へ、過不足なくコンクリを入れる技術では誰にも負けません。私がいるだけで仕事の終る時間も早くなり、出来上りも違ってくるのです。それに天端均らしも私の持役でした。
そんなわけで重宝がられてもいましたし、自分でも「オレが」という自負をもっていました。
ですから、コンクリの応援に来てくれといわれると、いやだ、いやだと思いながらも、反面、やっぱりオレでなければ、という得意な気持と責任感みたいなものがはたらいて、出かけてしまうのです。
遠くへ行けばそれだけ帰りが遅くなるのは当然として

も、私が行ったからって他の条件が悪ければ残業になります。
打設量が多かったり、そうでなくても生コンの配車が悪かったりすれば、三時間や四時間の残業はザラです。
もともと
「コンクリの松本組」
と自他共に許した松本組のコンクリ作業は、いつもふつうの標準より作業量が、二、三割方多いのです。
で、そんな残業をして帰ってくれれば夜中ですから、もうその晩は帳づけの仕事は出来ません。
すると、仕事がたまります。事務という仕事は、毎日きちんと片づけていかないと後が難儀です。
明日が給料という日に、計算が出来ていないと、一日現場を休むことになります。
何故なら、その晩に平山が尼崎まで取下げに行かねばならないからです。私はそれに同行しなければなりません。
「取下げ」
というのは、下請が元請に工賃をもらいに行くことをいうのです。平山が松本から労賃を受けとること、またはその「金」のことも取下げであり、松本が国土開発から工賃を受けとるのも取下げです。
平山が松本へ取下げに行くには、その以前に多田の賃金台帳が出来ていて、尼崎の渡部と私とで双方の台帳を照合し確認し、松本親方の承認を得なければなりません。
松本組では十五日と月末が〆切りで、給料の支払いは二十日と五日でした。月一回支払いになったのは翌年からです。そして給料の翌日が定休日というのも、前からの「きまり」でした。
とにかく、そんなわけで帳づけの為に現場の仕事を休まねばならないことも時々はありました。その日は日当がありません。タダ働きなのです。
しかし、平山彩父も、働く仲間も、あまりいい顔をしません。
自分たちの給料の計算のために休むのですから
「喜んで」
頼むぜ、春ちゃん、ぐらいなことは言ってくれてよさそうなものですが、そんな人はごく僅かで、大ていは苦り切っています。
「ただでさえ、人手不足なのに、世話役が休むなんて話にならん」
「帳面なんか、夜やりゃアいいんだ」
皮肉や当てつけが明らさまに聞こえてきますが、カンシャク持ちの私がわれながら不思議と腹を立てません。

人手の足りない時の現場の苦労が身にしみて判っているので、仲間の気持ももっともだと思ってしまうのです。

彼らだってやりきれなさについブツブツいうので、言ってることが必ずしも本気ではないことが判るのです。

（腹を立てても仕方がない）

とは思いますが、それだからといって、私自身のやりきれなさは解消しません。

そうして、夕方、平山が現場から上ってくるのを持って尼崎へ取り下げに行くのです。

（五）

私たちが多田の飯場へ入って間もない頃の或る夜、国土開発の所長が和服姿でぶらりとあらわれました。

これは思いがけないことでした。

元請の出張所長が、下請の飯場へ気軽に出かけてくることなど、あまり例のないことだからです。

国土開発の多田での工事は、多田神社の裏山のあたり能勢電鉄でいえば多田の次の平野で降りて、西へ少し登った広大な宅地造成で、現在「グリーンハイツ」と呼ばれている所です。

滝ケ滝の造成は、それにくらべればホンの片手間仕事、ついでにやっているような小工事です。

松本組はその「グリーンハイツ」でなく、小工事の滝ケ滝だけの下請けですから、国土開発多田出張所から見れば、最もチポッポケな下請です。

その飯場へ所長がわざわざ来たのは、数日前、松本親方、平山、私の三人が小屋入りのあいさつに事務所へ行った、その答礼のようなものでしたが、それにしても私たちには予期せぬ出来事でした。

食事中だった平山は箸を置き、居ずまいをなおして質問に答えたりし、所長が帰るまで姿勢をくずしませんでした。

それが所長に好印象を与えたようです。

「松本組の平山さんは偉い。礼儀作法というものを知っている。ああいう折り目正しい人の所なら若い衆のしつけもいいに違いない」

と、ベタボメなのです。そればかりか、

「炊事場と食堂が清潔だ。掃除が行きとどいていて、しかも整理整頓がちゃんとしている。ウチの独身寮の奴らも見習わせんといかん」

きれい好きの平山姐御が松本にやいやい言って作った

食堂を彼女自身が管理しているのですから、万更、所長の外交辞礼とばかりは言えません。

これが平山を得意にしました。

「どないや、ええ、お前らには真似出来んやろ。目上の人の話を聞くときは、ちゃん書 を聞いて、「食べい」言われてもかしこまっとかなあかんのや、ようおぼえとけや。これが礼儀ちゅうもんや」

「ミッが松本にやかましゅう言わんかったらやな、こんだけの炊事場は出来んかったのと違うか。松本はしぶりよったけど、ミッの言うこと聞いてよかったやないか」

寄るとさわるとこの自慢話です。うっかりすると日に三度も同じ話をきかされます。

「あんた、もうやめときんか」

と姐御がたしなめても

「うるさい、まァ聞けや。日本人は神さまを敬り、朝鮮人は先祖を敬う。ええか、礼儀作法ちゃうもんは……」

と果てしもありません。

自慢話のくり返しはうるさいにしても、所長の心証を良くしたことは、松本組にとって不利益ではありません。

以来、所長は何かと平山飯場に気を使ってくれました。

そして或る日のことです。

何かの祝いだということで、所長から飯場の全員に清酒の二合ビンが一本づつ届けられました。

「ちえっ、二合ビンか、けちくさい」

という奴もいましたが、人間の心理はおかしなものです。十人に二合ビン十本だとケチ臭く思い、同じ人数に一升ビン二本だと嬉しがるのです。

文句をいう奴がいても、毎晩の自前の他にプラス二合だから、みんないい気持になりました。

平山親父もそうです。いつもより酔いが廻ったようでした。

酔うといよいよ大きな声で私を呼びます。

「日野やッ。尼へ行くぞ。ついて来い」

「今からですか」

「今からやったら悪いか。松本はもう三日も来てへんやないか。え、多田の現場はどうでもええ思ってんのとちがうか」

「それは向うも忙しいからでしょう。多田は親父さんにまかせてるんだから」

「そや、そやけど、今日は何日や。え、五日やないか。若い衆の勘定はどないすんのや。松本が持って来てくれへんのやったら、こっちから取りに行かんならんやろが」

「そうですね」

「のんびりしてる奴があるかい。オイッ村上はまだおる